

広東語における疑問文形式の選択について

伊藤 健太郎

(言語文化学部 モンゴル語専攻)

キーワード：広東語，普通話，疑問文，文末語気助詞，副詞

0. はじめに

本稿では、中国語(以下普通話とする)において、述語を肯定否定と並べ疑問の意味を表す反復疑問文と文末に疑問の助詞を置くことにより疑問を表す是非疑問文の関係性について言及した先行研究を参考とし、中国の方言である広東語の反復疑問文と、陳述文+文末助詞の形で表現される是非疑問文の関係性について考察する。なお、本文中のグロス、図表番号、例文番号等は特に断りのない限り、筆者によるものであり、和訳は特に断りがないうり参照元から引用したものである。なお普通話は併音、広東語は粵併で音声を表記した。

1. 先行研究

卒論本体では先行研究としてマシューズ・イップ(2000)、沈(1992)、石井(2009)をとりあげた。本稿では紙幅の都合上、マシューズ・イップ(2000)より本稿に関わる最低限の文法事項、沈(1992)、石井(2009)でとりあげられた普通話の反復疑問文と是非疑問文の性質についての記述をまとめる。

1.1. マシューズ・イップ(2000)

マシューズ・イップ(2000)は広東語の諸否疑問文には大きく分けて、平叙文+語気助詞の疑問文、イントネーション疑問文、反復疑問文があると述べている。まず平叙文+語気助詞の疑問文についてマシューズ・イップ(2000: 407)は、最も簡単な疑問文形は平叙文の文末に語気助詞を付加することによって作られ、この用法は反語の意味を表すこともあると説明している。次にイントネーション疑問文については、広東語では用例数は限られるが、文末を上げることで疑問の意味を表すことができる用法であると述べている。最後に反復疑問文について、マシューズ・イップ(2000)は、A(述語)+not+A(述語)の形式の疑問文であり、述語を重ね間に否定のマーカ「唔 ng4」を使った構造であると説明している。

1.2. 沈(1992)、石井(2009)

石井(2009)は普通話の反復疑問文と是非疑問文¹は意味上あまり違いがなく、書き換えが可能のため同じ種類の疑問文とみなされていると述べている。沈(1992)は普通話の反復疑問文は、それがもつ「力」が陳述文+疑問形態素(疑問の助詞か上昇イントネーション)で構成される疑問形式である是非疑問文よりも大きいと述べている。沈(1992)はその「力」という語について「聞き手に対して回答を要請、または聞き手の回答を拘束するもの」(沈1992: 5)であると定義し、そのうえで「見込み」という語を用い普通話の疑問文形式の選択原理についての説明を試みた。沈(1992)は「見込み」とは「質問者の言表内容に向けられる陳述姿勢と定義でき、言表事態めあてのモダリティに属する」(沈1992: 16)と説明し、また話し手により任意の要素である見込みを疑問文に出現させることにより、「問いかけのモダリティをもつ疑問文が述べ立てのモダリティの疑問文に変質し様々な意味を表す。」と述べている。

沈(1992)は反復疑問文には「見込み」を反映させることができるが、是非疑問文にはできないと述べている。

また石井(2009)は反復疑問文の焦点は述語の反復部分にあるため、それ自体が疑問文中で焦点となるような副詞とは共起できず、是非疑問文は焦点が固定されていないため疑問文中で焦点となる要素との共起制限はないと述べている。

2. 調査

本節では調査について記述する。

普通話についての先行研究は述語を否定のマーカで挟み反復させた反復疑問文と陳述文+文末疑問形態素の形の是非疑問文を対象にしている。そのため本稿では、先行研究で扱われている疑問文型と形式的に一致するため、1.1.節マッシュューズ・イップ(2000)がいう A + not + A 形(述語の肯定否定)をとる形と平叙文の末尾に語気助詞をたした形の疑問文(それに加えて、文末上昇イントネーションを持つ疑問文)を調査の直接的な対象とする。

<調査方法>

調査には PolyU corpus of Spoken Chinese を使用する。このコーパスは Hong Kong Polytechnic University, Department of English により作成されたものであり、2015年1月1日に修正版が公開された。使用したコーパスの総語数は 248,715 語である。コーパス上には 25 の広東語のスク립トが記載されている。具体的な調査方法を以下の①～③に示す。

¹ マッシュューズ・イップ(2000)がいう反復疑問文、平叙文+語気助詞は石井(2009)がいう正反疑問文、諸否疑問文にそれぞれ対応している。また沈(1992)はそれぞれについて正反疑問文、是非疑問文とよんでいる。三者とも両疑問文に対する呼称は異なるが、形式的に対応しているため卒論本体では先行研究の要約箇所ではそれぞれの呼称に従い、調査についての章以降では反復疑問文、是非疑問文という呼称に統一した。そのため本稿もそれに従う。なお本稿 1.2.節では石井(2009)、沈(1992)の内容をまとめて要約したため、両疑問文の呼称は反復疑問文、是非疑問文で統一する。引用箇所では統一されていないものもあるが、反復疑問文、正反疑問文を、形式を根拠として本稿では同一のものとして扱っている。

調査① コーパス上にある広東語のスク립トから、疑問文を抽出し数え上げる。なお疑問文についてはマシューズ・イップ(2000)の疑問文についての記述を判断の根拠とし反復疑問文、是非疑問文、疑問詞疑問文、間接疑問文を疑問文とした。用例を判断する際、形式的に上記四種類のうちの疑問文に属するか判断しかねる場合は広東語が母語である香港生まれの香港人(1994年生まれ、日本語能力N1程度:以下“A氏”で統一)の方に判断していただいた。

調査② 石井(2009)の普通話の反復疑問文、是非疑問文と副詞との共起性についての記述を参考にして、広東語の反復疑問文、是非疑問文と共起可能な副詞、共起不可能な副詞について整理する。具体的には調査①においてコーパスから抽出した反復疑問文、是非疑問文の全用例と共起する副詞を手作業により抽出し、反復疑問文、是非疑問文、もしくは両方に共起した副詞から、何らかの共通性を見出すことを試みる。

調査③ ①で抽出した反復疑問文、是非疑問文に使用されている文末助詞について、反復疑問文のみと共起、是非疑問文のみと共起、またはどちらとも共起するという3つに分類し表に整理する。

3. 調査結果

3.1. 調査①の結果

調査①では反復疑問文が412例、是非疑問文が192例(疑問詞疑問文が475例、間接疑問文が208例)抽出された。

マシューズ・イップ(2000)がいう是非疑問文の反語を表す修辭的用法については石井(2012)における反語の定義を基に、A氏に判別していただいた。その結果コーパスから抽出された192例中37例が反語の意味を表していた。判断の根拠とした石井(2012)の反語の定義を以下に引用する。

1. 疑問文の形式を持っている。
2. 疑問文の機能を失っている。
3. 話し手の考えを強調するとともに、語気を含む。

(石井 2012: 2 を引用)

使用したコーパスから抽出された用例には反復疑問文の方が是非疑問文よりも多く見られた。また反復疑問文については、反語的用法とされたものはなく、反復疑問文が上記の定義でいう反語の意味を表すことはできない、または表しづらいと考えられる。

3.2. 調査②の結果

調査②では調査①の反復疑問文、是非疑問文にどのような副詞が共起するか調査した。その結果、調査①で抽出した反復疑問文のうち副詞と共起した例は42例、調査①で抽出し

た是非疑問文のうち副詞と共起したものは31例だった。

反復疑問文、是非疑問文両方と共起した副詞は「都 dou1、更加 gang1gaa3、仲、遮係 ze1hai6、真係、一定 jat1ding6、即係 zik1hai6」反復疑問文のみと共起した副詞は「順便 shong6bin2、究竟 gau3ging2、頭先 tau4sin1、即時 zik1si2」是非疑問文のみと共起した副詞は「淨係 zing6hai6、麻麻地 ma4ma4dei6、已經 ji5ging1、先至 sin1zi3」であった。

副詞「都 dou1」が反復疑問文と共起した例ではコンピュータの反復疑問「係咪 hai6mai6」と共起が確認されたが、ほかの述語の反復疑問形との共起は確認されなかった。

また、コーパスでは用例が見つからなかったが、A氏に以上の副詞と反復疑問文との共起性について判断していただいたところ、調査②で疑問文との共起が確認された副詞のうち、「頭先 tau4sin1(先ほど)」、「淨係 zing6hai6(だけ)」、「麻麻地 ma4ma4dei6(まあまあ)」、「都 dou1(も)」、「一定 jat1ding6(必ず)」、「更加 gang1gaa3(更に)」は反復疑問文と共起する場合「係唔係 hai6ng4hai6」もしくは「係咪 hai6mai5」、つまりコンピュータの反復疑問文以外とは共起することがないとコメントを得た。

3.3. 調査③の結果

以下は疑問文形式ごとに共起した副詞をまとめた表である。

表 1: 疑問文の形式とそれに共起した文末助詞

反復疑問文のみ	是非疑問文のみ	どちらも
なし	嘛 maa4	呀 aa3
先 sin5	啦 laa1	啊 aa3
該当漢字なし le55	嗎 maa1	呢 ne1
㗎 gaa3	掙碼 ngaa6maa5	咩 me1
嚟㗎 lei4gaa3	咦 ji4	架 gaa3
呀呢 aa3ne1	嘍 laak3	呀嘛 aalmaa4
	喎 wo3	下話 haa6waa5
	卦 gwaa3	
	架喇 gaa3laa3	
	下嘛 haa6maa2	
	架咩 gaa3me1	
	啱 gwaa	
	呀話 aalwaa5	
	該当漢字なし ma6	
	嘅 ge5	

上昇イントネーションを持つ是非疑問文をコーパスから判断するには根拠が疑問符の有無のみになってしまい確実な判断をしかねるため表からは除外したが、A氏に判断してい

ただいたところ 16 例がコーパスから見つかった。

上の表 1 から分かるように両疑問文形式で多く同様の文末助詞が見られるが、上の表の結果から特に注目に値すると考えた点は反復疑問文では文末助詞なしの用例が最も多いという点である。また、反復疑問文に比べて是非疑問文における文末助詞の用例はより豊富であり、二つの文末助詞が合わさった用例が是非疑問文の方に多く見られた。反復疑問文の文末助詞なしの場合には上昇イントネーションの用例はない。

4. まとめと考察

4.1. 疑問文形式と話者の語気

調査①では広東語において反復疑問文が是非疑問文よりも 2 倍近く多く使用されることが確認された。ここまで用例数の差がみられたことは注目に値する。

A 氏の自省によれば、広東語において A+唔+A の反復疑問文は純粹に質問をする気持ちのときに使う形であり、文末助詞または疑問のイントネーションを用いた是非疑問文は純粹に相手に質問をしたいときに用いる形ではなく、疑問の形をとりながら何らかの話し手の意図を含むときに用いる形であるため、質問をして相手から情報を聞くという目的に使うには不自然な文型だそうである。例文を示す。

(1) 你 去 唔 去 東京?
 nei4 heoi3 ng4 heoi3 tonglgingl
 あなた 行く NEG 行く 東京
 あなた東京行きますか?

(2) 你 去 東京 呀(他の文末助詞を置くことも可)?
 nei4 heoi3 tonglgingl aa3
 あなた 行く 東京 FP
 東京行くの?(文末助詞の意味次第で意味が変わってくる。)

(筆者作成による)

(1)の場合、話者は単純に聞き手が東京へ行くのか、行かないのかを質問しており、(2)の場合は疑問の意味は残っているが、文末に置かれる助詞の種類によって文の意味が変わってくる。(2)の場合相手に問いたです、もしくは驚きのような意味が発話に込められている。

また、調査①でコーパスから抽出された是非疑問文のうち語の定義に当てはまるのは 192 例のうち 37 例であった。

ここで先行研究から、沈(1992)の普通話の疑問文の性質についての記述を参考として以下に引用する。

正反疑問文は、文末助詞や疑問詞、上昇イントネーションなどといった疑問形態素をいっさい必要としない(というより、すべての疑問形態素と共起できないといった方が正確であろう)。正反疑問文は、形式上二つの選択肢を並列させる点において、選択疑問文に近似しており、その派生形とも言われているが、特定の命題についてその真偽を問う、という論理的意味では、むしろ是非疑問文と同じである。

(沈 1992: 43 を引用)

沈(1992: 43)によれば、普通話の反復疑問文は疑問形態素との共起が不可能であり、それは反復疑問文が他の意味を介在させることを許さない強い疑問の形であるためであるとしている。

上記 A 氏の内省を加味して反復疑問文と比較した場合、是非疑問文が仮に相手に自分が知らない情報を尋ねる力、疑問としての機能を持っていたとしても、反復疑問文のそれよりは弱いのではないかと考えられる。しかし広東語の反復疑問文は文末助詞と共起しうる。それについては調査③を参考に 4.3.節で見解を述べる

4.2. コピュラの反復疑問文の特殊性

調査②について先行研究では反復疑問文と共起しないとされていた副詞「都 dou1」が反復疑問と共起する例が確認されたことに加え、そのうちすべてがコピュラの反復疑問形「係咪 hai6mai6」との共起であった点についてより詳細に考える必要がある。先行研究では、マッシュューズ・イップ(2000)が広東語のコピュラの反復疑問文および付加疑問文の「係唔係 hai6ng4hai6」、「係咪 hai6mai6」について言及しており、これらは英語でいうところの *Is it true that~* のような意味だと説明している(マッシュューズ・イップ: 410 を要約)。石井(2009)の焦点の定義を参考にすれば、疑問文の焦点とは話者が尋ねたい内容のことである。是非疑問文の形は文全体で質問する形であり、反復疑問文とは述語部分について聞き手にその成否を尋ねる形である。つまり「係唔係 hai6ng4hai6」、「係咪 hai6mai6」は反復疑問文において確認の意味を加えるために文に付け加えるような形式であると考えられる。

- (3) 佢 係 唔 係 想 坐 直通車 呀?
 koei5 hai6 ng4 hai6 soeng2 zo6 zik6tung1ce1 aa3
 彼 COP NEG COP したい 座る 直行列車 FP
 彼は直通列車に乗りたくないんじゃないの?

(マッシュューズ・イップ 2000: 410 を引用)

(3)の例文は話し手が文全体について相手に確認するためにコピュラの反復部分を付け加えている用法である。

石井(2009: 7)によると、話者が反復疑問文を使用した場合、話者が尋ねたいのは述部であり、是非疑問文は文全体について尋ねる形である。これを参考にすると、調査②のコピュラの反復疑問文は先行研究で見た是非疑問文と同様に、文全体について聞き手に質問す

る用法だと言える。

石井(2009)では反復疑問文の焦点は述語の反復させた部分にあるという理由から疑問文中で焦点となる副詞は反復疑問文と共起することができないと説明されている。しかし上記より、コンピュータの反復疑問文は焦点(相手に尋ねたいこと)が述部ではなく文全体である。そのため、焦点が文全体である是非疑問文的な性質を持っており、コンピュータ以外の述語を用いた反復疑問文で起こるような共起制限は働かないと考えられる。

4.3. 文末助詞の必要性

調査③の結果の中で興味深いのは、反復疑問文では僅差ではあるが文末助詞が使用されない用例が最も多かったということ、是非疑問文は反復疑問文よりも多様な文末助詞をもつ用例が確認されたということである。以下に文末助詞なしの反復疑問文の用例を示す。

- (4) 咁 你 會 唔 會 支持 佢哋 嘅 訴求?
 gam3 nei5 wui5 ng4 wui5 zi1ci2 keoi5dei2 ge sou3kau4
 じゃあ あなた AUX NEG AUX 支持 彼ら の 要求
 じゃああなたは彼らの要求を支持する?

(PolyU corpus of Spoken Cantonese から引用)

A氏によれば、上記の例文はぶっきらぼうな印象を受けるという印象をもつと述べており、A氏ならば両方の文とも「呀 aa3」など助詞を文末に置くと説明していた。

また、以下は上昇イントネーションを疑問形態素としてもつ(A氏に判断していただいた)是非疑問文の用例である。

- (5) 你 仲 話 你 係 反對?
 nei4 zung6 waa6 nei4 hai6 faan2deoi3
 あなた まだ 話す あなた COP 反対
 あなたはまだ反対って言うてるの?

(PolyU corpus of Spoken Cantonese から引用)

A氏によれば、文末助詞がない反復疑問文と同様どの文も冷たい印象を与えるものであるとのことであった。基本的な意味は文末助詞を持つ是非疑問文と同じであるが、広東語の性質上、目に見える形での疑問形態素を用いないという表現方法で話者の態度、語気を表していると言うことができる。

普通話の反復疑問文は石井(2009)が述べているように、述語を肯定否定と並べた部分に常に焦点が固定されており、相手に回答を要請する強い力を持ち話者の語気などほかの要素を介在させない。そのため語気助詞等とは相性が悪い形と考えることができる。しかし、調査③では複数の種類の文末語気助詞と共起している。文末助詞がない反復疑問文の用例と上昇イントネーションを疑問形態素としてもつ是非疑問文は、相手に話者にとって未知

の情報を求める力が出た例で、話者の語気が少なくなっている例ととらえるか、極端に相手に詰め寄るようなニュアンスが出たと考えられる。

4.4. 全体のまとめ

普通話の反復疑問文と是非疑問文の関係よりも、広東語の両疑問文の関係は距離が近い。しかし共起できる文末助詞の多様性や、文末助詞なしの用例の多さから考えれば広東語の反復疑問文は是非疑問文よりも相手に回答を要求する沈(1992)がいう「力」が大きい形式であると思われる。是非疑問文と共起した文末助詞は反復疑問文と共起した文末助詞と比べ様々な種類、組み合わせが見られることから、話者の語気をより自由に含むことができる形ということができ、広東語の是非疑問文は広東語の反復疑問文よりも疑問の意味からかい離しやすい形だといえる。そのため、母語話者の内省では、話者により多様な意味をもつ是非疑問文と明確に疑問の意味を表す(同時に話者の語気を介在させうる)反復疑問文というような区別をしていると筆者は考える。

グロス一覧

NEG 否定 / FP 終助詞 / PRF 完了 / AUX 助動詞 / ADV 副詞 / COP コピュラ / PREP 介詞 / PRF 完了 / CLF 類別詞

参考文献

- 石井友美 (2009) 「反復疑問文の特性: 副詞との共起を中心に」『お茶の水女子大学文学報』 28: 74-90.
- 石井友美 (2012) 「正反疑問文の反語と焦点」『人間文化創成科学論叢』 14: 1-8.
- 沈国威 (1992) 「中国語における反復疑問文の選択原理について」『文林』 26: 37-66.
- マッシュューズ, スティーブン・ヴァージニア・イップ (2000) 『広東語文法』千島英一・片岡新 (訳) 東京: 東方書店.

インターネットの調査資料

粤语发音字典 <http://www.yueyv.cn/> (最終閲覧日 2016/8/25)

どんと来い、中国語 <http://dokochina.com/> (最終閲覧日 2016/11/1)

コーパス

PolyU spoken Corpus of Chinese <http://wongtaksum.no-ip.info:81/corpus.htm> (最終閲覧日 2016/8/25)